

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 13 日現在

機関番号：12401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2010～2012

課題番号：22720237

研究課題名（和文） 近代日本社会における「戦争体験の語られ方」とその社会的影響に関する研究

研究課題名（英文） Research on "how war experience is told" in modern Japan society, and its social influence

研究代表者

一ノ瀬 俊也 (ICHINOSE TOSHIYA)

埼玉大学・教養学部・准教授

研究者番号：80311132

研究成果の概要（和文）：本研究では、戦前戦後の地域社会などで、「戦争体験」がどう語られたか、「戦争の記憶」が次代の人々の意識をどのように規定したかを分析した。具体的な手法は、各地域の戦死者遺族会の会誌、戦友会史・部隊史などから関連する記述を収集し、その変化を探るというものである。その結果、日中・太平洋戦争のように、戦争の目的が不明瞭な戦争では会誌などの記述も不明瞭となり、戦争の意義づけが戦死者に最も身近な人々ほど困難であったという、一種の逆説の存在を見いだすことができた。

研究成果の概要（英文）：In this research, I studied how "wartime experience" was talked about in the prewar and postwar community. In addition, I analyzed how "memory of the war" prescribed the consciousness of next generation. Specifically, from history of memory magazine of the bereaved family society and history of fellow soldier society, I collected associated descriptions and investigated a change. As a result, like the Second Sino-Japanese War and the Pacific War, the meaning of the war became illegible, the descriptions of memory magazines became illegible. As the people who were the most familiar to a person killed in action, it became difficult to give war significance. I was able to find the existence of a paradox here.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	100,000	30,000	130,000
2011 年度	400,000	120,000	520,000
2012 年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総計	900,000	270,000	1,170,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：日本近現代史・戦争

1. 研究開始当初の背景

(1) 近代日本の地域社会において、ある戦争の記憶がどのように語られ、次代の戦争観を規定したのかを戦前・戦中・戦後を通じた

一貫した視野に立って分析した研究が不在であるという現状に鑑み、その分析を行うことで、現代日本社会における戦争観、すなわち過去の戦争の意義についての認識がいか

なる歴史的経緯のもとに形成されているのかより正確に理解できると考えられた。

(2) また、とくに戦前の戦死者遺族とその意識に関する政府、都道府県、各種団体の作成資料は各研究者が部分的に研究することはあっても、体系的に収集されることは従来なかったため、これらを収集して分類、調査分析する必要性も存在していた。

2. 研究の目的

(1) 戦前の地域社会や戦友会などの「場」で、自己や肉親、家族の「戦争体験」がどのような場できかに語られたか、「戦争の記憶」が児童や戦死者遺族をはじめとする次代の人々の意識をどのように規定し、戦後・現代社会にまで及んでいるのかを分析する。

(2) 戦死者遺族のために作られた援護などの諸制度に関する資料を収集し、国家社会が遺族の悲嘆・不満をいかに抑制・抑圧しようとしたのかを分析して、その遺族意識に対する影響を解明する。

3. 研究の方法

(1) 日本各地の資料保存機関などに分散して保存されている各地域の戦死者遺族会の会誌、戦友会史・部隊史などから関連する記述を収集して関連箇所を抽出、戦前、戦中、戦後にわたる変化を探る。

(2) 前項との関連で、戦死者遺族援護に関する遺族用手引き書・担当者マニュアルなどの資料を各方面から体系的に収集・分析し、それが遺族たちの意識・戦争観に及ぼした影響を解明する。

4. 研究成果

(1) 各地域の戦死者遺族会の会誌・戦友会史などから関連する記述を収集し、その変化を探った結果、日中・太平洋戦争のように、戦争の目的が不明瞭な戦争では、戦死者に最も身近な人々ほど肉親や家族の死の意義を見いだすことが困難であったという、一種の逆説の存在を見いだすことができた。研究成果は遺族意識の変化に関する研究（『故郷はなぜ兵士を殺したか』）、従軍兵士の体験に関連する研究（『米軍が恐れた「卑怯な日本軍』』）などを公刊することで公表済みである。

(2) 本研究で収集した遺族援護に関する資料を整理・分類し、資料集にまとめて公刊中である（『昭和期「銃後」関係資料集成』全9巻、2012年度に3冊刊行、2013年度内に残り6冊を刊行予定）。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔図書〕（計11件）

①一ノ瀬俊也、六花出版、昭和期「銃後」関係資料集成第6巻（地域援護に関する諸法規）、2013、346

②一ノ瀬俊也、六花出版、昭和期「銃後」関係資料集成第5巻（各地域軍事援護の実際4／地域軍事援護の理想像）、2013、484

③一ノ瀬俊也、六花出版、昭和期「銃後」関係資料集成第4巻（各地域軍事援護の実際3）、2013、445

④一ノ瀬俊也、六花出版、昭和期「銃後」関係資料集成第3巻（各地域軍事援護の実際2）、2012、342

⑤一ノ瀬俊也、六花出版、昭和期「銃後」関係資料集成第2巻（各地域軍事援護の実際1）、2012、412

⑥一ノ瀬俊也、六花出版、昭和期「銃後」関係資料集成第1巻（政府の軍事援護政策）、2012、437

⑦一ノ瀬俊也、他、吉川弘文館日記に読む近代日本3 大正、2012、263

⑧一ノ瀬俊也、他、吉川弘文館日記に読む近代日本2 明治後期、2012、271

⑨一ノ瀬俊也、文藝春秋、米軍が恐れた「卑怯な日本軍」帝国陸軍戦法マニュアルのすべて、2012、329

⑩一ノ瀬俊也、他、有志舎、講座明治維新5 立憲制への道、2012、257

⑪一ノ瀬俊也、角川学芸出版、故郷はなぜ兵士を殺したか、2010、284

6. 研究組織

(1) 研究代表者

一ノ瀬 俊也 (ICHINOSE TOSHIYA)

埼玉大学・教養学部・准教授

研究者番号：80311132